

平成29年6月11日(日) 南九州城郭談話会例会発表資料 始良公民館

松坂城の縄張について



(県道浦漆線より松坂城を望む)

始良市企画政策課

下 鶴 弘

目 次

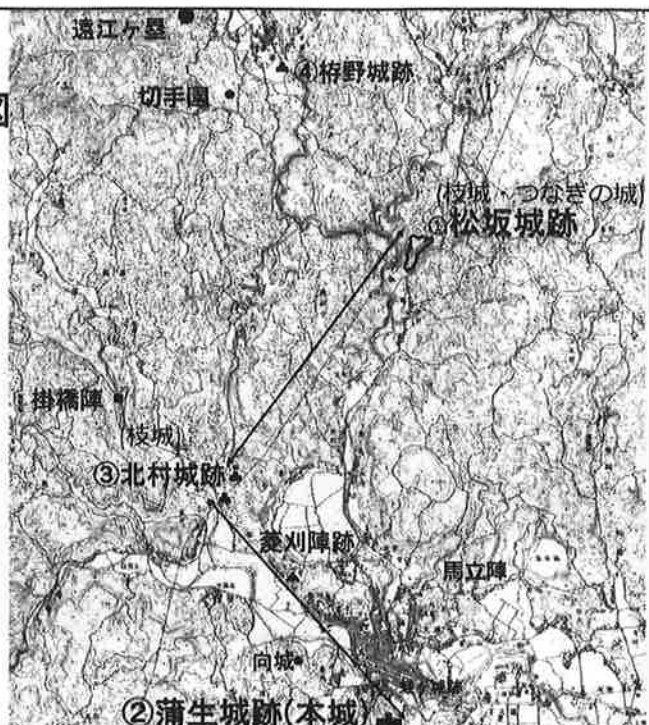
- | | |
|--------------|-----------------|
| 1. 位置図 | 9. 蒲生町報第42号 |
| 2. 地理的歴史的環境 | 10. 松坂城跡縄張図 |
| 3. 周辺地形図 | 11. 縄張図解説 1 |
| 4. 戦国時代の南九州 | 12. 縄張図解説 2 |
| 5. 戦国時代の始良地方 | 13. 文献による地名比定 |
| 6. 山城規模比較 | 14. 現況写真 1 |
| 7. 松坂城跡関連年表 | 15. 現況写真 2 |
| 8. 文献史料 1～5 | 16. 本城枝城のネットワーク |

1. 位置図

蒲生地区
山城分布図
(戦国期)

蒲生城本丸—北村城間
= 3,320m
北村城—松坂城主郭
= 3,150m
ほぼ等距離にある

「鹿兒島県・世城館跡調査報告書」より



2. 地理的環境・歴史的環境

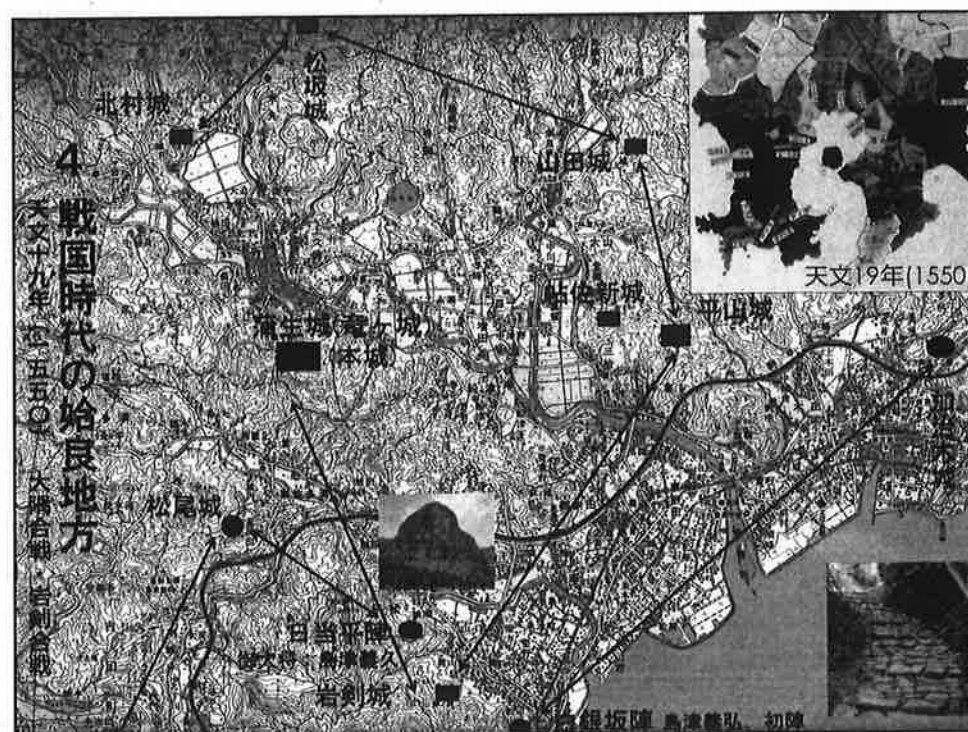
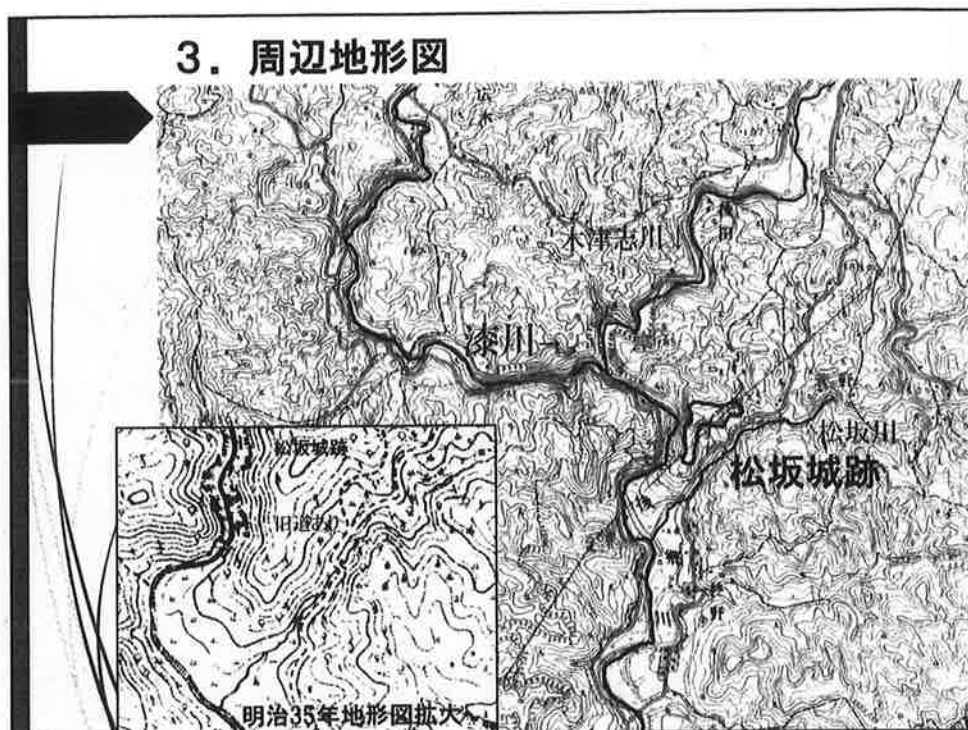
○松坂城跡は、始良市蒲生町の蒲生総合支所から北へ約4kmの山間部の丘陵にある。所在地は始良市蒲生町大字米丸小字松坂4998-2番地（主郭部）であり、最高所には九電の鉄塔が建っているため比較的に探しやすい。遺構が確認できる面積は、10筆25,600㎡である。

○城跡西側では、上流で漆川と木津志川が合流して別府川水系の後郷川となり、高さ百m以上の深い溪谷を形成して柵野集落の迫田を南へ流れる。松坂城の東側は木津志から流れ出る松坂川が山裾を削り、略南北へ延びたやせ尾根約400mに遺構が残る。主郭部は尾根中央の東西方向に130m広がる。

○蒲生中心部から延びた旧道を切通として城内に取り込み、北側の木津志・漆へ通じていた。現在では道は川寄りを通り城跡から車道は遠のいた。蒲生城と祁答院方面をつなぐ、重要な軍用道路としてルート上の松坂城は重要であった。

○松坂城は本城蒲生城の北の枝城であり、対となる南の枝城は岩剣城である。

3. 周辺地形図



5. 松坂城跡関連年表

西暦	年号	事 柄
1529	享禄2	1月、祁答院重武は帖佐本城・新城・山田城を攻め下す。
1539	天文8	島津貴久の市来平城攻めに蒲生清綱(親)従軍し、戦死する。
1549	天文18	3月、蒲生・肝付(加治木)・祁答院氏ら吉田(島津領)を攻める、5月、島津方は肝付兼演の加治木を攻め、11月に島津氏へ下る
1554	天文24	義弘は岩剣城で初陣を飾る。
1554	天文24	北村城攻めに島津貴久は大敗し、歳久負傷、弟子丸播磨戦死
1556	弘治2	3月18日、島津軍、松坂城を攻めるが落ちず、
1556	弘治2	10月19日、島津軍、松坂城を総攻撃し、城将中原加賀以下百余人戦死、
		10月20日、義弘漆攻めで切手園に陣し遠江ヶ壘・梶野城落城、
1556	弘治2	11月25日、義弘は荒平に陣する。
		12月1日、島津貴久・尚久は尼ヶ城(新梶)を本陣とする。
1557	弘治3	4月15日、菱刈陣は島津軍の総攻撃を受けて落城、4月20日、蒲生城の陥落、

6. 文献史料

文献1 39「長谷場越前自記」(『鹿兒島県史料・旧記雑録後編一』)

一(前略)弥構鉾楯ヲ、吉田境目ニ於て、敵方之北村・松坂蒲生方より手切を致す刻に、帖佐之内に山田の地頭梅北宮内左衛門尉とて、世に無隠兵者に被仰付、其近處に松坂といへる山城を祁答院之抱へなり、是を連に梅北方へ忍ひけり、彼在城之雑兵共、頃者天文廿四年十一月十八日の寒天に、雪の降る道凌ぎ、祁答院之市立に出てけらし、此留守を見て八則天之与る所也と心得て、鹿兒嶋に早く言上被致けり、然る處又四郎忠平様と奉申ハ、十八歳になり給ふ、御武運を御祈願にて、小城権現に御参籠ましくて、丹精を被抽なり、此権現と奉申者云、御願圓滿無疑、松坂城を被攻砌に者、爲先手忠平様之御人衆、大手の口に押寄て、梅北宮内左衛門尉と名乗て眞先に切て入り、板城戸を打破りける処に、寄手の兵もの落合てかきはしを取り懸て、彼の城戸を引崩す、其時に梅北方者きどより下に打敷る、是を見て引退んとせし間に、御大将忠平様の切て入せ給へ、爰をせんと防戦す、この場をも被切崩、敵の兵もの打烈て詰之城にそ引き籠る、彼城主中村父子三人者進出て防戦ふ処、渋谷の兵物甘騎計我先にと指合て、だねをくつろげて征矢鷹俣を打番ヒ、矢食作て、指詰め引、散々に射たりけり、懸りける処に下(後略)

文献2「山本氏日記」1

(『鹿児島県史料・旧記雑録後編1』)

三月之分 弘治二年(二五五七)

卯日

一十八日、帖佐衆五百計にて松坂の城ニ指寄られ候て、火矢いつけられ候へ共取消候間、指儀もなくひらかれ候処ニ、てき三百八かりにてつき来り候て、御方ニも敵ニも手おひあまたあり、

酉日

一(六月)五日、松坂の野くひにてつり仕方たくまれ候て、敵三人打伏られ候、梅北宮内左衛門尉方壱人打れ候、山田衆細田五藤兵衛方壱人、鹿兒島衆福島新左衛門方壱人、以上此衆三人高名被申候、其比山田ニ御屋形様貫久御光儀時分にて、松坂の城のむかへの長(イニ尾)迄御馬をよせられ、城の舳御覧あり、此日の勝吐気者鎌田刑部左衛門方、此日典厩さま(忠将)・又四郎様(義弘)御供アリ、

文献3「山本氏日記」2

(『鹿児島県史料・旧記雑録後編1』)

十月之分 弘治二年(二五五七)

卯日

一十八日、蒲生松坂の城ニ衆遣有へきたためニ、ひつし刻計与御屋形さま帖佐のことく御光儀有、同 若殿様者山田のことく御光儀有、

辰日

一十九日、松坂の城に御衆遣あり、其趣ハ又四郎殿様鹿兒島衆御供ニて、西の口にさし寄候、野頸口ニは大隅の衆典厩御大将ニてさしよせられ候、水のとりの口ニハ左兵衛佐殿南方の衆めしつれられ候て指よられ候、吉田衆・伊集院衆をハ、北村の衆から見のためにニ草ふせられ候、かくて明ほの時分、三方よりときをあわせてせめられ候、城衆中ニも祁答院の番衆、其外三百計にてふせき戦といへ共不叶、則時ニきり掛け候、西の口にて又四郎殿様御合戦めされ候、其外ニかしニて合戦有、此日打とられ候敵、松坂の地頭中原加賀父子三人、祁答院番衆二名字の人拾壱人、此外

つかけ〇候くひ四十二なり、其外ニかしニ
りすてられ候死人、以上此日九十二なり(後略)

文献4 45 「義弘公譜中」 (『旧記雜錄後編一』) p 25

(読み下し)

弘治二年丙辰三月十五日、太守修理大夫貴久公は隅州蒲生城の邊地松坂壘を攻める。門壁は全て騎歩に備えて堅く守る。然しながら味方は四面より進む。関を發し山谷を動く、城裏士卒は羽箭を飛ばし大石を投げ防禦敢て緩めず、此之時に、梅北宮内左衛門尉國兼は諸兵に魁る、時に兄三郎左衛門尉義久主與忠平は三尺の劔を提げ、直前城門を攻め破る、且つ復た將に城壁之際を超えんとす、戎衣の勇士忽ち突出し來りて我と對す、忠平自ら旬て曰く、「島津又四郎忠平なり」、強敵干戈を陣す、挑戦し筋力盡す、然りと雖も忠平遂に其首を獲る、而して後戦場を退いて身體を見れば、則ち五矢を鎧上に受ける、實に忠平廿有二歳、斬敵首を斬る初なり、

文献5 44 「貴久公譜中」 (『旧記雜錄後編一』)

弘治二年丙辰三月十五日、貴久患蒲生之未入手裏、而欲攻之、則彼城岸高谷深、而四面共是絶地、以故先将責

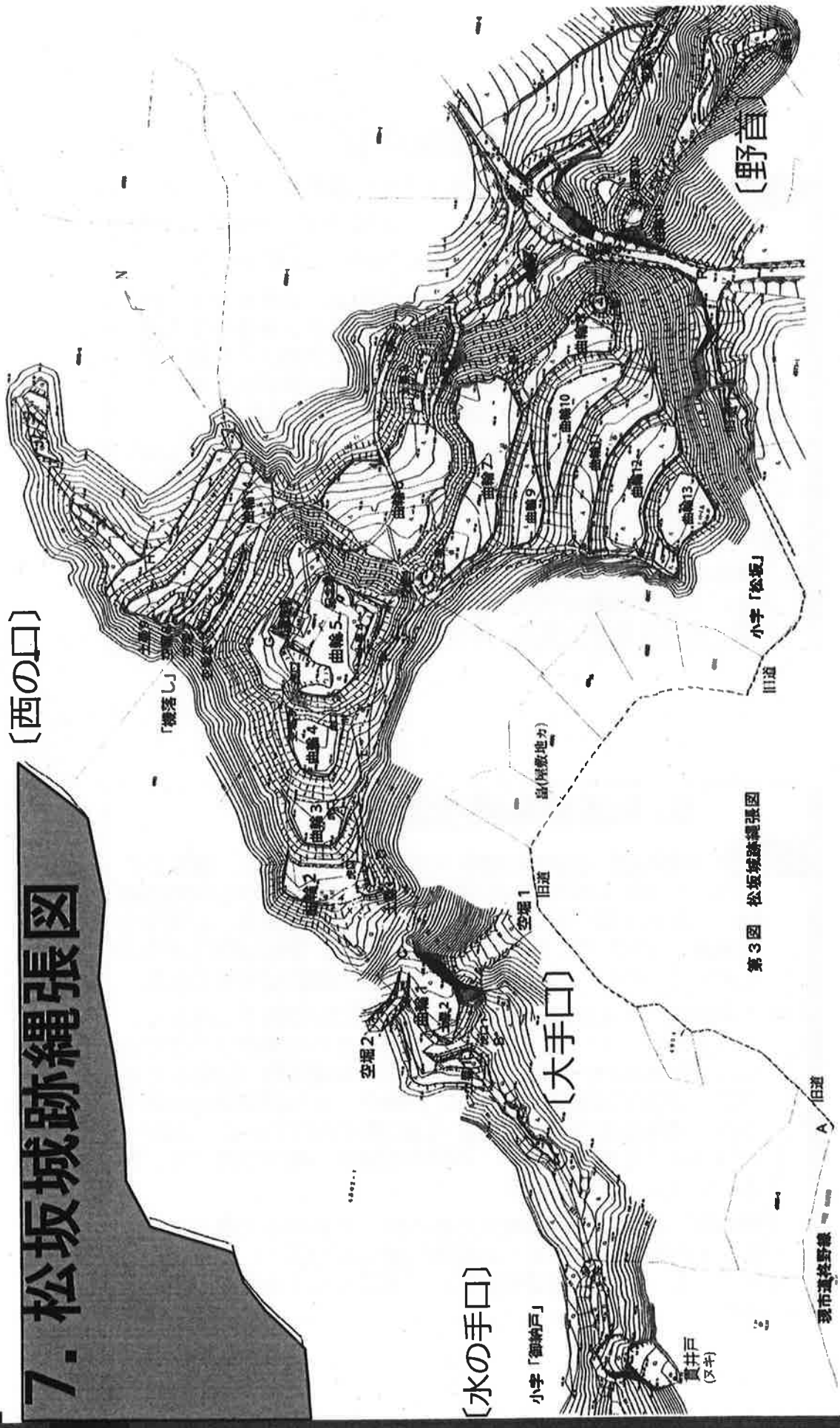
松坂之壘、此地亦門壁墮柵全備堅固、然而多勢逼迫挑戰、則飛羽箭投大石防禦不緩、于時梅北宮内左衛門尉國兼先諸兵、以督戰也、二男又四郎忠平手三尺劔責破城門、且將超壁之際、戎衣強敵突出前來、忠平斬伏當敵捕其首、退戦場見鎧上、則所受之敵矢有實五个、茲時忠平二十二歳、斬敵之初也、

弘治二年十月十九日、攻松坂城、忽以陷之、祁答院氏・蒲生氏之士卒戮一百餘人、我之軍中戰死者一人・民庶一人、只二人耳、

同年十一月廿五日、進蒲生城邊、占稱七曲之地、結一陣矣、以馬立之地又結一陣也、爰蒲生氏之與黨有菱刈左無頭者、十二月中旬、救蒲生氏來、設一陣於北村堺、在于此矣、

7. 松坂城跡縄張り図

〔西の口〕



第3図 松坂城跡縄張り図

8. 松坂城跡縄張図解説1

【水の手口・大手口】 南尾根の先端には、「ヌキ」と

呼ばれる井戸跡(直径11m上下二段)がある。築城時のものであれば、古い井戸となる。ここを「水の手」と想定した。

- 柵野集落から旧道を登り、空堀1の手前を左に折れると、内枡形虎口の「大手口」に達する。稍両脇が盛り上がるので土塁とした。この空間の曲輪1は東西から迫る空堀1と空堀2によって城道は隘路となる。曲輪2の南端は一部崩落する。土塁3の東側を城道は通り、曲輪3・4の脇を抜ける。
- 主郭の曲輪5には曲輪4の西側へ通らなければ虎口に達しない。曲輪5西側は鉄塔工事により削平を受けている。曲輪5の規模は長辺28m×短辺22mである。東側の土塁4は東の通路に備えている。
- 【西の口】 主郭の曲輪5西側には、高低差約10mの曲輪14がある。この特徴は平坦面を3本の空堀を切り直進を妨げている。川側は絶壁となり、最も川底に近く「機落し」と考えら

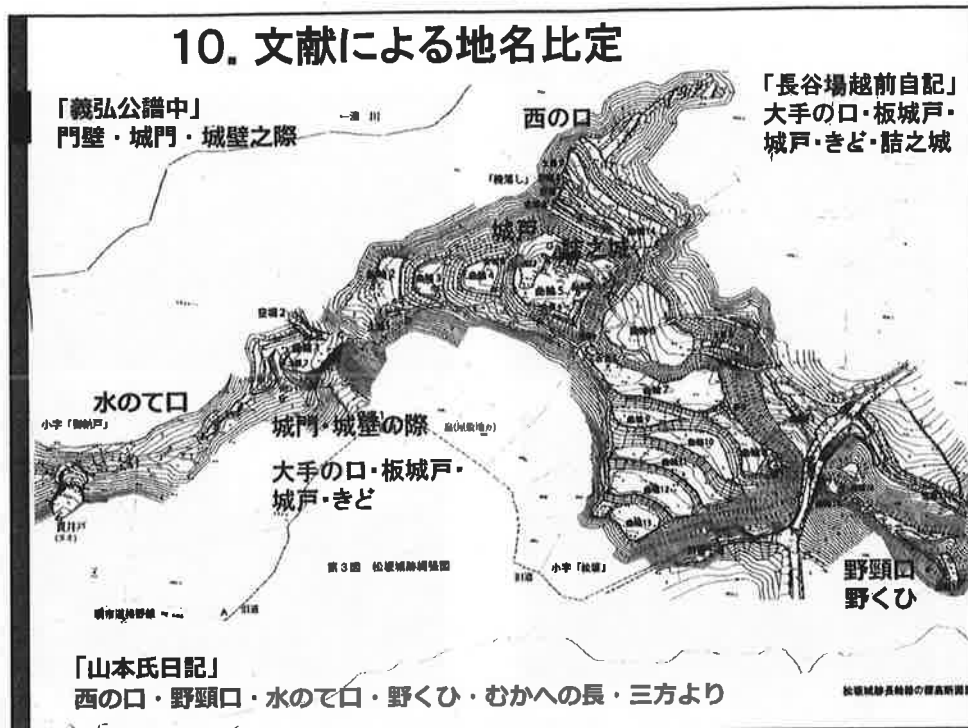
9. 松坂城跡縄張図解説2

【城東部】 山裾の旧道を大手口へ左折せずに、道なりに進むと、空堀9の大きな切通に達する。入口Rから城側の曲輪8にある土塁7までは30m以上の高低差がある。空堀9では見通しが利かず、緩やかなS字を描く。彫底は現在通行のためにコンクリート舗装となり、本来の底面は不明である。

- 主郭曲輪5の東には曲輪6があり、虎口は空堀5しかなく、土塁8が守っている。曲輪6から曲輪5への通路は不明であり、空堀4のみが可能か。現在九電の管理通路が設定しているが、城道とは無関係である。曲輪7・8は城東部の主郭である。南側の緩斜面は曲輪9~13に削平されている。この一帯は小字「松坂」であり、急坂の旧道から地名が起こり、城名になったと考えられる。

【野首口】 切通の東側は城外であるが、曲輪18は土塁7より低く設けてある。曲輪17までの尾根は細く削り落とし、急崖となっている。この尾根裾を空堀11が通路として木津志・漆方面に延びる。

10. 文献による地名比定



11. 現況写真1



12. 現況写真2



貴井戸跡



曲輪14にて空堀6(左)空堀7(右)を望む



曲輪8にて土塁7を望む



曲輪4から曲輪5(最高所)を望む

13. 本城枝城 の ネットワーク

